

開会挨拶 済生会理事長 炭谷茂

済生会理事長の炭谷でございます。今日は休日にもかかわらず、第7回済生会生活困窮者問題シンポジウムに、このようにたくさんの方にご参加をいただきまして、心から感謝申し上げます。

私ども済生会は、生活困窮者問題に取り組んでいるわけでございます。最近の生活困窮者の問題はずいぶん変わってまいりました。特に私自身はここ10年、ないし20年の経済や社会の構造変化の結果だろうと思っております。そのために社会的な排除や孤立という問題が起こっている。今日のテーマである共生社会というものがなかなか築けないという状況に来ているのではないかと思っております。

そのため私どもは、ソーシャルインクルージョン（社会的包摂）という理念に基づいて努力をしているところでございます。私自身、ソーシャルインクルージョンこそ、これからの社会に大変重要なものであると思ってい続けてきましたけれども、今日基調講演をさせていただきます潮谷先生は、かつて熊本県知事としていち早くソーシャルインクルージョンの重要性に着目され、県政の中でも推進していただき、大変心強い思いをしたわけでございます。

また、今日シンポジストとしてご参加いただいております太陽の家の山下理事長のところも、明確にソーシャルインクルージョンを社会福祉法人の理念として掲げているという数少ないところではないのかなと思っております。

ソーシャルインクルージョンを達成するために何よりも重要なのは、今日のサブタイトルになっています就労、働くということではないのではないかと。働くことによって社会に参加ができると私は思っています。私は今年9月に韓国に調査にまいりました。なぜかという、韓国では障がい者や長期に失業している人、また刑務所からの出所者などは、なかなか社会で仕事が見つからない。それらの人たちの就労の場をつくる。場づくりが大変進んでいます。日本以上に進んでいます。私はこれをソーシャルファームと呼んでいますが、韓国の場合、すでに2,000社以上できています。韓国は非常に進んでいるな、日本も同じように頑張らなければいけないと感じたわけです。

幸い、今回このようなテーマを取り上げたわけですが、潮谷先生の熊本県でもこのようなソーシャルファームづくりはいろいろなことで試みられていますし、また近く、東京都の小池都知事もソーシャルファームを推進するための条例をつくるということ、9月26

日の都議会で明言されたわけです。このように全国で就労の場をつくろうという動きが起
こっていますので、今回のテーマは大変ふさわしく、このようなことを考える絶好の機会
になるのではないかと思っています。

今日、シンポジストとしてお願いいたしました方々は、まさにこれにピッタリな方々ば
かりでございます。山下理事長の太陽の家は、初代理事長であります中村洋先生が「No
Charity, but a Chance!」、つまりわれわれには慈善はいらない。働く場所、チャンスがほ
しいだけだということをモットーとし、これを現在も継続しているわけです。まさに就労
の場として、日本ではもちろんトップの就労の場づくりですが、たぶん世界でも一、二を
争う障がい者のための働く場をつくっていらっしゃいます。また、今日のシンポジストを
拝見しますと、農福連携というかたちの農業法人の岩崎さんもこのようなこととお話し
ただけるのではないかとということで、大変関心を持っているわけです。

そのようなことで今日のテーマはまさに今日必要なこと、タイムリーな話題でございま
す。ご参加いただきました皆様方の今後のお仕事や活動のための一助になるよう期待いた
しまして私のご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございます。